

## 博士論文全文の要約

博士論文題目：『韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民族誌的研究－韓国華僑のビジネスと華僑協会を中心に－』

金桂淵（総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻）

### はじめに

韓国において「華僑」とは、1882年に朝清商民水陸貿易章程が締結されてから朝鮮戦争までに中国大陸から朝鮮半島に渡ってきた人びとや、その人びとを先祖にして韓国で生まれ育った移民第2世代以後の人びとを指している。1945年に植民地支配から解放された朝鮮半島は、1948年に南北分断を、その2年後には朝鮮戦争を経験した。こうした情勢の中、19世紀末から20世紀前半にかけて朝鮮半島に移住してきた中国人たちは本国に帰ることができず、そのまま「韓国華僑」となる。彼らは、韓国政府と国交が結ばれていた台湾の中華民国籍を取得し、中華民国を祖国として認識せざるを得ない状況におかれた。しかし1980年代末に冷戦体制は崩壊し、韓国は中国とも国交を結ぶことになる。こうした東北アジアの政治状況の変化は、彼らのアイデンティティに大きな影響を与えた。

### 1 研究目的

本論文の目的は、「韓国華僑」というアイデンティティ形成のダイナミズムとメカニズムを明らかにすることである。そのために、韓国華僑らが組織する華僑協会の役員たちを対象に、彼らのビジネスと華僑協会をめぐる葛藤を民族誌的に記述する方法をとった。

### 2 本研究の位置付け

海外華僑に関する既存の研究は、中国人のアイデンティティが中国という国家に帰属するのかどうかという点に関心を持ってきた。これは、アイデンティティの定義が誰から規定されるかという問題に関わっている。華僑のエスニシティ研究は、移民が伝統的な中国の文化を保持し続けているという前提の下で、彼らの文化的な特徴が議論されてきた。したがって、彼らが現地社会にどのように同化されたか（Skinner 1957）、同じ中国文化の中でもサブカルチャーの区分がどのように生じるのか（Crissman 1967）という点が主要な関心事となった。

近年では、移民が移民先においてローカライズされていく過程を扱った研究が登場している。東南アジア地域各国からの移民の現地化、中国の改革開放と社会主義体制の崩壊、交通・通信の発達に伴うグローバルな移動の活発化に応じて、華僑アイデンティティは複雑化し多様化している。そして移住先の状況に対する個人の認識や判断によって各々のアイデンティティが構築されるようになっている。この実態を近年の研究は反映しているのだ。そのような研究では、複雑な移民の状況の中で、中国的な文化の原理を能動的に駆使する主体としての個人（Hsing 1997）が想定される。居住地の地域的特徴、個人が判断して選択した経済的利益（陳 2011）や宗教（市川 2005）などがエスニシティを構築する要素ともなっている。すなわち、サブ集団のアイデンティティは、個々の主体によって確立されたものである。

ソビエト連邦崩壊後、人、モノ、資本のグローバル化の議論が活況を呈するようになったが、韓国内において華僑研究は移民研究の周辺に留まっていた。そうするうちに2000年代に入り韓国では、東南アジア地域をはじめとする各国からの移民に対して社会的関心が寄せられるようになった。また中国の経済力が無視できないものとなり、韓国内における華僑の社会的地位についても注目が集まるようになった。いくつかの人類学的研究（Chung 2012；季昶昊 2010、2012b、2012c）や華僑の経済力とネットワー

クに焦点を当てた歴史的研究（姜珍亞 2004; 李正熙 2005a、2006）を除けば、韓国華僑を扱った研究の大部分が法や行政に関連する問題、特に人権に関するものである。ここには韓国の差別的政策への反省が込められている。しかし別の見方でいえば、彼らは、華僑のアイデンティティは制度的な規制や政治状況など外部的な条件によって規定されるという立場を支持しているともいえる。

鍋倉（1997）が指摘したようにエスニシティ研究では、政府の動きを視野に入れなければならない。政府の政策に沿って、個々の主体が自分の表象する方法と形態を変えることもある。韓国華僑は、中国大陸の共産化と朝鮮戦争によって、出身国である中国と断絶させられた生活を営んできた。韓国政府の政策の変化や社会的変化が彼らの生活に大きな影響を及ぼしてきたことは言を俟たない。このような背景から提起される韓国華僑の差別論は意味がある。

それにもかかわらず、筆者は、中国と断絶された時期はもちろん、東西冷戦の崩壊以降の韓国華僑のグローバルな移動と韓国内の生活を理解するためには、彼ら移民の主體的な性質に注目しなければならないと考える。また、韓国華僑と呼ばれる一つのエスニシティではなく、様々なサブ・アイデンティティについて注目しなければならない。本論文は、韓国華僑という移民のアイデンティティが出身地または移民現地という外部から付与されたものではなく、移住先現地の社会変動や移民の状況に影響されながらも、華僑が自らをどのように定義し、彼らがいかに韓国華僑アイデンティティについて議論しているかを明らかにすることにした。そして「階層」をエスニシティのサブ要素として把握し、華僑内部の社会経済的階層の違いがどのように異なるアイデンティティを構築しているかを論じた。

### 3 調査地の概要と調査方法

本論文は、韓国の大邱広域市を中心に、他にソウル特別市、仁川広域市、忠清北道などにて約1年9ヶ月をかけて行った現地調査資料に基づいて記述している。大邱は、17箇所に分けられている韓国の行政区域の一つであり、首都ソウルを除いて6箇所ある広域市のうちの一つである。面積は884.46 km<sup>2</sup>である。人口は、ソウルの1/4である約250万人、このうち、外国人は約2万人である。外国人の中でも、華僑人口は約1,000人、全国の約4%を占める。

フィールドワークの方法としては、華僑協会が関わる華僑関連の各種イベントを中心に参加し、一時はキーインフォーマントが運営する店で働きながら、華僑の生活へのアクセスを試みた。

### 4 本論文の構成

本論文は全6章から構成されている。序論と終論以外、本論は4章である。

第1章の前半では、本論文の調査地である大邱広域市を中心に、韓国華僑の定着過程をエスニック・ビジネスの変遷から捉え、さらにそれを韓国の社会変動の中に位置づけた。華僑の大邱への移民の記録は1905年から見る事ができる。植民地期に行われた京釜線鉄道建設は、山東省出身の中国人が大邱とその周辺都市に移住する機会になったと考えられる。朝鮮戦争期になると、全国各地の華僑たちが大邱に避難し、定住していった。朝鮮半島の分断は、避難してきた華僑の帰還の道を閉ざしてしまった。韓国は中国と断交し、台湾と国交を結んだため、韓国に定住した華僑は台湾籍を獲得した。1960年代末になると、米国への移民ブームと韓国政府の外国人に対する排他的な政策の影響で、多くの華僑が米国に移住していった。また、韓国内に残った華僑の大勢が飲食業に業種転換をした、多くの華僑が米国に移住していった。また、韓国内に残った華僑の大勢が飲食業に業種転換をした。1992年の韓中修交まで、華僑は台湾や第3国への移民、あるいは韓国での現地化を選択しなければなかった。しかし韓国への適応は容易いものではなかった。第1章の後半では、華僑と韓国人の間の相互認識について記述した。韓国華僑は、中国人という国家的アイデンティティが付与されているにも関

ならず、それから抜けだそうとしている。むしろ自分たちが置かれた現実をディアスポラ的な状況として認識することから、韓国華僑としてのアイデンティティは生み出されていた。彼らのアイデンティティは、世代と階層によって異なっている。それは、世代と階層によって、中国への帰属意識、台湾との関係性、韓国人との関係が異なっているからである。

第2章では、韓国華僑人口の半分以上が従事する飲食業（中国料理店）と、エリートの特任職である医療業（韓医業）という二つのビジネスに注目し、彼らが起業した背景、事業の運営、職場での日常生活を検討した。それを通して韓国華僑アイデンティティがどのように解釈され、形成され、発信されているのかを考察した。飲食業は、その定着初期から、中国という出身地の文化を強調し、それを自らのアイデンティティとして発信することで利益を得る、循環的構造によって維持されてきた。他方、韓医業と洋医業に分けられる医療業では、エスニック・アイデンティティの表象は弱体化しつつある。韓医業においては、中国の医学を示す「漢医」から韓国の医学の成長による「韓医」への変化に伴い、中国との関連性は、専門性の承認として中国や台湾への留学経験が履歴として書かれる程度に留まるようになった。洋医業においては、華僑アイデンティティを発信する必要がさらになくなり、彼らの起業や事業運営には華僑よりも韓国人とのネットワークが活用されることが明らかになった。

第3章では、華僑協会という組織の特徴と変化について考察した。華僑協会の役員職は無報酬であるが、経済的に成功した華僑たちは、役員資格を獲得して、協会で活躍しようとする。華僑協会は、その意志が発現される場である。同時に華僑協会は、日常的には異なるレベルでエスニック・アイデンティティを駆使する飲食業者とエリート医療業者の両方が、同様の華僑アイデンティティを享有する場にもなっている。このような特徴を持つ華僑協会は近年、移民の世代交代、華僑の現地化、華僑協会の運営経費調達などの困難さなどにより、移民者の親睦団体としての性格が弱まっている。ただ、華僑協会は民間団体であるにもかかわらず、華僑と台湾・韓国・中国をつなぐ連絡窓口になっており、さらには戸籍の管理と戸籍謄本の発行も行っている。このような行政的性格は維持・強化される傾向にあった。華僑協会はこうした疑似行政機関的性格を持っているため、台湾・韓国・中国との間でバランスを上手に取ろうとする傾向が強まり、ディアスポラのアイデンティティを自発的に生み出す装置にもなっていることがわかった。

第4章では、華僑協会における二つの派閥の在り方とその対立に着目した。華僑協会の二つの派閥は、リーダーや構成員の職業を中心に区分される。小規模の中華料理店と食品流通業に従事している人びとからなる派閥と、医療業者や大規模の中華料理店を運営する人びとからなる派閥がそれである。前者は後者を「ヤンボッゼンイ（スーツ派）」と呼び、後者は前者を小規模の中華料理店では、バイクを利用して出前を行っているため、「オートバイ（バイク派）」と呼んでいた。筆者は彼らの呼称を彼らのアイデンティティを分析するキーワードとして取り上げた。

スーツ派とバイク派という二つの勢力間の葛藤は、華僑協会が主催する文化祭、親中国系団体の発足、蒋介石の銅像の改修という事件の中で現れ、深まっていった。バイク派は、戦略的に脱冷戦以後の新華僑を引き寄せて「中国人」を代表する華僑アイデンティティを主張する一方、スーツ派は蒋介石の銅像をとりあげ、台湾を象徴することによって自分らの独自性を強調した。本章では、これらの派閥間の葛藤を考察することで、移民の世代交代、移住先での職業の階層格差などによって地域社会に向けて発信するアイデンティティが異なっていること、さらにはアイデンティティをめぐる議論が現在進行形であることを指摘した。

終章では、本論文を通して明らかになった以下の3点を提示した。

一つ目に、韓国・中国・台湾という国民国家の登場と世界的冷戦体制が原因となって、韓国に移住してきた華僑たちは社会的に曖昧な立場におかれた。そのため、彼らは日常においてアイデンティティを戦略的に選択するようになった。

二つ目に、韓国華僑が華僑協会に注目する理由は、華僑協会が疑似的行政機関であるからだけでなく、アイデンティティの形成と発信の場にもなっているからである。

三つ目に、華僑協会役員間の派閥による葛藤は、世代や職業という社会的位相の差異によって生まれている。この葛藤こそが韓国華僑のアイデンティティのダイナミズムを形成しているのである。

以上のように、本論文は華僑のビジネスと協会をめぐる様相を中心に、韓国の地域社会における華僑アイデンティティの形成と、変化のメカニズムを明らかにした。

## 5 参考文献

- Chung, Eun-ju, 2012, Learnig to be Chinese: The Cultural Politic of Chinese Ethnic Schooling and Diaspora Construction in Contemporary Korea, Department of Anthropology, Doctor Thesis, Harvard University.
- Crissman, Lawrence W., 1967, The Segmentary Structure of Urban Overseas Chinese Communities, *Man* 2(2): 185-204.
- Hsing, You-tien, 1997, Building Guanxi Across the Straits: Taiwanese Capital and Local Chinese Bureaucrats, In *Ungrounded Empires: The Cultural Politics of modern Chinese Transnationalism*, Aihwan Ong and Donald Nonini, eds. Pp. 143-164, New York: Routedge.
- Skinner, G. William, 1957, *Chinese Society in Thailand: An Analytical History*, Ithaca: Cornell University Press.
- 강진아 (姜珍亞), 2004, 근대 동아시아의 초국적 자본의 성장과 한계-제한화교기업 同順泰(1874?~1937)의 사례-, *慶北史學* 27: 49-78 (「近代東アジアのトランスナショナルな資本の成長と限界—在韓華僑企業同順泰(1874?~1937)의事例」『慶北史學』27: 49-78) .
- 이창호 (李昶昊), 2010, 한국 화교의 공간인식과 이주성 (移住性), *Homo Migrants* 2:115-136 (「韓国華僑의空間認識と移住性」『Homo Migrants』2: 115-136).
- \_\_\_\_\_, 2012b, 이주민 2 세대의 고향(home)의 의미와 초국적 정체성: 화교 동창생들의 인터넷 커뮤니티를 중심으로, *韓國文化人類學* 45(1) : 3-41 (「移住民 2 世代의故郷 (home) 의意味とトランスナショナルなアイデンティティ: 華僑의同窓生의인터넷 커뮤니티を中心に」『韓國文化人類學』45 (1) : 3-41) .
- \_\_\_\_\_, 2012c, 이주민들의 의사소통 방식에 대한 일고찰 : 인천 차이나타운 거주 화교(華僑)를 중심으로, *다문화사회연구* 5(1):5-32 (「移住民たちの意思疎通方式に関する一考察: 仁川チャイナタウン居住華僑を中心に」『多文化社会研究』5 (1) : 5-32) .
- 李正熙, 2005a, 「米軍政期における在韓華僑の貿易活動—貿易会社万聚東を中心に」『華僑華人研究』2 : 65-78.
- \_\_\_\_\_, 2006, 「植民地朝鮮における華僑經濟に関する研究 (1905 年~1930 年)・下編—華僑布木商の商業活動を中心に—」『京都創成大学紀要』6(1) : 27-54
- 市川哲, 2005, 「華人のエスニシティと宗教: オーストラリアにおけるパプアニューギニア出身華人のキリスト教団体」『宗教と社会』(11) : 3-24.
- 陳天璽, 2001, 『華人ディアスポラ—華商のネットワークとアイデンティティ』東京: 明石書店.
- 鍋倉聰, 1997, 「多文化主義におけるエスニシティの編成 : 『フォーマル・エスニシティ』とシンガポール『多人種主義』」『京都社会学年報』5:151-170.